



おくの まこと
奥野 誠 氏

生 年 昭和28年

住 所 田辺市龍神村東

昭和28年、和歌山市に生まれる。昭和50年、武蔵野美術大学を卒業後、大阪で美術専門学校の講師を務めながらアトリエを構えて美術造形作家として活動を始める。

昭和58年、龍神村で廃校舎の活用と芸術による村おこしを目的とした龍神国際芸術村が開村し、その取組に興味を感じていたところ、芸術村村長から誘いを受け、その構想に魅かれて移住を決断、昭和59年、職を辞し、家族で大阪から龍神村に移り住み、龍神国際芸術村の運営に携わることとなる。

氏は、「山村文化の掘り起こし」を活動の柱の一つに位置付けて活動する中で、龍神村ではかつて紙が漉かれていたが、戦後まもなく途絶えてしまったということを知り、「山路紙」という紙漉きにたどり着いた。

山路紙は、古くから龍神村で漉かれ、地域の主要な産物の一つであったが、洋紙の普及とともに、紙漉きの伝統は途絶えていた。しかし、日高川上流域は楮の産地でもあり、原料となる楮の生産農家が残っていたことから、その楮を原料とする山路紙の復活に向けて、かつて紙漉きをしていた職人や村人に話を聞き、原料や道具、漉き方等について研究を重ねていく中で、紙漉きが徐々に氏の創作活動の中心となっていく、素朴で力強さを特徴とする山路紙を復活させるに至った。

楮は、古くから紙原料として栽培され、日本の文化を支えてきた植物であり、毎年冬に、その年に伸びた枝を刈り取り、蒸して剥いだ樹皮が紙の原料となる。龍神村では、これを乾燥させて出荷していた。紙漉きは、表皮を取り除いた後、水と太陽でさらし、灰汁で煮る。そうして柔らかくなったものを、叩いて細かくし、紙漉き槽に入れて漉き上げ、絞り、板に干す、これらすべての工程を手作業で行う。

氏が、平成4年から取り組んでいる地元小学校6年生の卒業証書作りの指導は31回を数え、また、一般の人々を対象とした紙漉き体験教室を開くなど、長きにわたり和紙文化の伝承・普及に努めている。

平成21年から、「田辺市龍神山路紙保存伝承施設」の運営を開始し、原料の採取に始まる製作の全工程を昔ながらの技法で行い、匠として技術の向上に努めながら、紙漉きだけでなく、原料の楮の特性を生かした様々な芸術作品を制作し、展覧会で発表した作品が高い評価を受けるなど、山路紙の魅力を広く伝えている。

第 55 回 (令和 6 年)

平成22年には公益財団法人全国税理士共栄会文化財団から伝統工芸技術分野における助成を受けるとともに、平成23年には「全国手漉き和紙青年の集い和歌山大会」を主催するなど、和紙文化の発展に尽力する。

このほか、平成30年には中国上海市のギャラリーにおいて二人展を開催するなど、氏の作品は海外でも注目されている。

地域や人との関わりを大切にしてきた氏の活動は、その後、多くの人が龍神村へ移住する礎となり、平成16年から平成18年にアトリエ付きの住宅が芸術家向けとして龍神村内に建てられるきっかけとなったほか、都市部からの移住を経て、山路紙を復活させ、平成28年には「紙漉き」で和歌山県名匠表彰を受けるなど、長きにわたり和紙文化の普及と発展に努めてきた氏の功績は誠に多大である。

(略 歴)

昭和28年 和歌山市生まれ
昭和59年 大阪府東大阪市から日高郡龍神村（現田辺市龍神村）に転入

(学 歴)

昭和50年 武蔵野美術大学造形学部美術学科油絵専攻卒業

(主な活動等)

昭和59年 龍神国際芸術村アートセンターへ移住、その運営に携わる
紙漉きとその技法による作品の制作を開始し、以降、紙漉きワークショップ・展覧会を各地で開催、現在に至る

昭和63年 龍神国際芸術村開村5周年記念芸術祭を企画、開催

平成4年～ 地元小学校6年生の卒業証書作りを指導、現在に至る

平成17年～ 龍神村民文化祭実行委員長として村民文化祭の開催に携わり、現在に至る

平成18年～ 和歌山大学紀南サテライト授業「現代社会と紙漉き」開講（～平成19年）

平成21年 田辺市龍神山路紙保存伝承施設の運営を開始

平成22年 公益財団法人全国税理士共栄会文化財団から伝統工芸技術分野における助成を受け、和紙文化の振興に取り組む

平成23年 全国手漉き和紙青年の集い和歌山大会を龍神村内において開催

平成25年 龍神国際芸術村開村30周年記念芸術祭「Art in 龍神村」を開催

平成29年 名匠表彰受賞記念展（和歌山県民文化会館・和歌山市）、奥野誠紙の世界展（紀南文化会館・田辺市）を開催

平成30年 二人展（中国 上海市）を開催

(役職等)

平成17年～ 龍神村文化協会会長

(受賞歴)

平成28年 和歌山県名匠表彰（和歌山県）